

禅

27号(通卷207号)



中禅寺湖 (栃木県・日光)

ご縁を結ぶ

東 絶海 ◆

最近、若い女性が毎週土曜日に道場に来て坐禅をし、翌日曜日の坐禅・作務もして帰る姿を見受けます。四国道場も現在、禅子（女性の修行者）が3名になっているので、女性にとっても違和感がなくなってきたのかなあと思うと同時に、このような殺伐とした時代でも道を求めて遠くより尋ねて来る方はおるもんだと、うれしくなっています。

禅に関心を持たれた理由は、人それぞれでありましょう。顧みますに、私自身なぜこの道にご縁ができたのかということを思いますとき、死への恐怖があったのだと気づきます。生家がお墓の近くにあったせいで、物心ついたときから、葬式の列によく遭いました。田舎のこととて、当時は土葬でありましたので、棺桶を担いだ列によく遭い、肉親を亡くした方々の泣く声を聞き、死というものの恐ろしさにおびえたものでした。長ずるに従って、いろいろな楽しいことや苦しいことに紛れ、その思いは表面上はなくなったかのようにみえましたが、やはり心の奥底には残っていたのでしょう。その証拠に一時期キリスト教に傾注しましたし、学生時代にお寺に下宿したこともありました。

そのお寺に下宿したおかげで、先師澄徹庵大重月桂老師に巡り会うことができ、この道にご縁ができたのであります。そして、先師から「高知に残れ」と言われ、高知を終の棲家としたわけでありました。したがって、高知に残った限りは坐禅を続けるということでありました。社会において仕事を続ける中で道心がつつい萎えそうになった時、「なぜ、高知におるのか？」という自問自答を繰り返して、今日まで

修行を続けてまいりました。

閑話休題。生死の問題は、いくら科学が進んでも科学で解決できるものではないと思います。人間として生をうけた限り、また、人間が動物である以上生きるということが原点であり、その対極にある死への恐怖は、その思いの大小はあるとしても、厳然として各人が持っていると思いますし、まじめに生きていけばいるほど、いずれその解決を迫られるものであると思います。そこに正しい宗教が提示されなければならないのです。

まさに「大法に不可思議なし」で「神秘を語らず迷信を説かず」して、この生死の問題を解決する道が我が門であります。一人でも二人でも多くの人とご縁を結び、この道あることを知っていただき、若い時に生死を脱得して、一安心して貰いたいと切に願うものであります。

そして、自分自身に安心立命がいけたら、その喜びを他の人にも味わっていただくように、さらにご縁の輪を共に手を取り合いながら広げて行きたいものです。

ではつぎに、どう生きていけばよいか？ 我が門に『五戒』があります。その『五戒』とは……

- 一 嘘うそについてはいけない。
- 一 怠けてはいけない。
- 一 やりっぱなしにしてはいけない。
- 一 我儘してはいけない。
- 一 ひとに迷惑をかけてはいけない。

この『五戒』を守って生きていけばよいと思います。

子供でも知っておりそうな文言ですが、さて、これをこの通りに実行していると赤い顔をせずに言い切れる人が何人おるでございましょうか？

私自身の日々を省みて恥じ入るばかりですが、嘘をつかないよう、怠けないよう、やりっぱなしにしないよう、我儘しないよう、ひとに迷惑をかけないように日常の言動を自分で見つめながら精進しております。

また、人間形成に終りはありませんので、即今只今を大事に、正念の不断相続に努めてまいりたいと念じております。

しかしながら、眼を一般社会に転じましたら、やはり「じみとくどせん 自未得度先どた 度他（自ら未だ得度せざるに、先ず他を度す）」で、『四弘誓願』を己の誓願として、一人でも二人でも多くの志ある人のご縁を結ぶために、この命の炎が尽きるまで、願輪を転じてまいりたいと念じております。

最後に、思わずぞっとする古人の言葉をご紹介しますと終りと致します。

○関山国師曰く「慧玄が這裏に生死なし！」

（慧玄：関山国師の諱。いみな しやり 這裏：ここ）

○馬大師曰く「日面佛！ 月面佛！」

【馬大師不安。院主問う、“和尚 近日尊候如何？” 師云く、“日面佛！月面佛！”】（不安；病気になること。院主；監院。寺院の事務一切を主宰する者。近日尊候如何？；ご容体はいかがでございましょうか？）

合掌

■著者プロフィール



東 絶海（本名／彪）

昭和23年、鹿児島県生まれ。高知大学卒業。元高知県職員。昭和47年、人間禅大重月桂老師に入門。現在、人間禅師家。庵号／洪濤庵。